



大石 学

(東京学芸大学名誉教授・特任教授)

■モデル「喪失」と「創出」の時代

2020年、世界は混沌の時代に突入し、グローバル化とナショナリズムの相克、民族や宗教をめぐる葛藤・対立が深まっている。日本では、2011年3月の東日本大震災をはじめ多発化する激甚災害によって、開発至上主義や科学万能主義に基づく「欧米モデル」の限界が露呈した。

第二次世界大戦の敗戦により壊滅した日本社会は、戦後、欧米をモデルに復興・成長した。この時期、効率化・合理化によるGNP（国民総生産）、GDP（国内総生産）、GNI（国民総所得）などの数字の増加が、発展の重要な指標とされた。いわば、結果主義、成果主義による幸福の追求であった。そのためには、優秀なリーダーと、指示を効率的にこなす受動的人間による、トップダウン型のシステムが必要とされた。短時間のうちに、より多くの「正解」にたどり着く能力が求められ、偏差値による序列化・選別化が進んだ。

しかし、その後経済が停滞し、震災後の復興のなかで、人々は新たなモデル創出の作業に取り組

み始めた。それは、地域での助け合い、ネットワークづくりである。ここでは、個々のメンバーの意志を大切にする合意主義、ミスや失敗も教訓として認め合う過程主義など、ボトムアップ型の安定と幸福追求が目ざされている。

こうしたなかで、「平和」「環境」「人権」「命」などの価値があらためて再認識され、共有されている。復興には、自助・共助・公助の諸政策が展開されたが、このうち多様かつ急を要する現場では共助が注目され、自らの役割を認識し、主体的に行動する能動的人間の大切さが確認されている。

本年実施の新学習指導要領が謳う「主体的・対話的で深い学び」（当初言われていた「アクティブラーニング」）は、まさに能動的人間を育てる教育への転換である。

■「教育の目的」と「江戸の教育力」

さて、教育の究極の目的とは何か。私は「共通性（普遍・全体）と個性（特殊・個別）をバランスさせる意志と力の育成」と考えている。すなわち、「人と同じでありたい」「人と同じではないや

2020年の世界と教育

だ」という相反する気持ちを調整する意志と力の育成である。この難しい「バランス力」こそ、教育を通して身につけるべきものと考ええる。

バランス力が、人、地域、組織、国家、世界など、さまざまなレベルで発揮されることによつて、「平和」と「安定」が維持され、発展する。

そして、この視点から、江戸時代の教育を振り返ると、また新たな面が見えてくる。江戸時代は、古代以来の神仏の裁きや、1000年続いた戦国時代の武力・戦争による問題解決を否定・克服し、「公儀」の名のもとに、人が人を、法に基づき裁く制度やシステムを確立した。この結果、国内で戦争がなく、外国とも戦争をしない、250年以上の「徳川の平和 Pax Tokugawana」が実現したのである。そして、その基盤となったのが、「江戸の教育力」であった。

当時、世界各地を見たのち、極東の小国日本に到達した外国人の多くは、江戸社会の庶民教育の普及とリテラシーの高さ、社会の秩序と安定に衝撃を受けた。読み書きそろばんという基礎学力（共通性）に、職業、地域、興味関心などによる

個別教育（個性）が共存していた。当時の学習は、直接キャリアアップや収入増につながるものではなかった。藩校などを除けば、人々は義務ではなく、自らの意志で学び、入塾期も退塾期も自ら決めた。各自の好奇心・知的欲求に基づき、それぞれのペースで学んだ。こうした共通性と個性の共存・バランスが、「江戸の平和」を支えたのである。

■世界・未来への発信

本年開催される東京オリンピック・パラリンピックでは、共通ルールのもとで、世界のアスリートが頂点を目ざして競い合う。しかし、私たちは、この「平和の祭典」が、過去、世界的にも珍しい、長期の「平和」を達成した歴史をもつ日本で行われることを、改めて認識すべきであろう。

人類全体の普遍的価値（共通性）と、各国・各地域固有の価値（個性）のバランスでしか、世界の「平和」は実現しない。東京オリンピック・パラリンピックは、政治や経済の危機・対立を深める世界に、江戸の「平和」と教育の意義、そして人類の未来の可能性を発信する好機でもある。